



はある。回復役に

異世界を乱す暗黒ヒール









プロローグ

一人ぼっちには様々な種類が存在する。

たとえば俺一 -枚本優人の場合、単純に友達作りに失敗したタイプ。

大して顔が格好いいわけでもなければ、リレーの選手に選ばれるような運動神経もない。

人に自

慢できる才能も、熱中している趣味もない。

友達作りの肝となる、他人との共通点やきっかけが、 俺には一切ないのだ。

強いて挙げるとすれば、少しだけオタク気質なだけ。

付け加えると、そのオタク気質さえあれば勝手に人が寄り集まって友達ができるなんていう、 受

け身で甘っちょろい考えを抱いていた愚か者だ。

これが、俺が一人ぼっちになってしまった理由……の一部である。

理由というか、原因かな。

もう一つ、違うタイプの例を挙げてみよう。

俺が行動を共にしている水色髪の三つ編み魔法少女 ノアの場合は、 性格が極端に臆病で人見

知り。至ってノーマルな、ぼっちらしい理由だと聞いた。

一人になってしまった過程によって、その後のぼっち生活も大きく変わってくる。

これまで俺は、自分以外にも孤独に過ごしている奴らを何度となく見てきた。

などなど。 たくさんいると思っているが、実は金魚のフンとして仲間からウザがられているカンチガイぼっち いるのが好きなマイペースぼっち。クラスカースト最上位の集団と一緒に行動し、自分には友達が 進学や進級のせいで周りに友達がいなくなってしまったニューフェイスぼっち。 単純に一人で

思ったりはしない。 になっていると思われがちだが、 そんな奴らに対して、 傍から見れば皆似たような理由で一人ぼっちになっている……あるいは理由なんかなくても一人 俺は後ろ指を差してバカにしたり、 それは違う。 ぼっちには様々な理由があり、 安っぽい同情を押しつけて気の毒に 種類が存在するのだ。

どこか親近感を覚えて、微笑ましい気持ちで見守っている。

なった奴もいる。 孤独なのは自分だけじゃない。友達作りに必死になっている奴もいるし、 好きで 人ぼっちに

思えるようになった。 そう思うと、 少しだけ心が軽くなって、 一人ぼっちでいるのは悪いことじゃないの かも……そう

中学のときに一度だけ、 嫌な一人ぼっちを見たことがある。

あのときだけは、親近感を抱くことはなく、 ただただ嫌だなと思った。

強い嫌悪感を覚えて学校に行くのが辛くなった。一人でいることはやはり悪いことなのかもしれないと、考えを改めさせられる瞬間でもあったし、一人でいることはやはり悪いことなのかもしれないと、考えを改めさせられる瞬間でもあったし、

同時に、俺は少しだけ恐怖を感じていた。

及ぶんじゃないか、 次は自分なんじゃないか。もしくは、 今まで近しい存在と感じていた他の 一人ぼっちの奴に手が

の片隅に残っている。 そのとき、学校では滅多に口を開かなかった俺が思わずぽつりと漏らした独り言が、 今でも記憶

――最悪、と。

ぼっちの理由

1

少し肌寒いが、 (し肌寒いが、吹き抜ける微風は汗をかいた体に心地よい。地平線からわずかに顔を見せた太陽の光を反射して、朝雲 朝露がキラキラと輝く大草原。

その緑の絨毯とでも言うべき中を、少年と少女が並んで歩いていた

杖本優人。 大人しいスタイルの黒髪に、 心配されそうなくらい線の細い体つきをした少年 それが俺

隣を歩くのは、 童顔の女の子 全身青い服に身を包み、 旅仲間の魔法使い、 頭上の青空よりも一層澄んだ水色の長髪を三つ編みにし ノアだ。

暗いうちから長いこと歩き続けた俺たちは、 やがて小高い丘の上に辿り着いた。

「つ、着きましたね」

眼下に広がる景色を眺めて、 ノアが疲労を滲ませながら大きく息を吐い

俺は袖で額の汗を拭いながら応える。

「う、うん、なんとか」

この草原の丘から望めるのは、 いかにも都会的な雰囲気を醸し出している大都市だ。

日本のビル街とはまるで造りが違うが、頑丈そうな石でできた高層の建物が所狭しと並び、 人工

的な薄青色の光が街全体を仄かに照らしている。

底安心させてくれた。 まだ距離があるにもかかわらず、こちらまで街の喧騒が届いてきて、 野宿続きだった俺たちを心

これが魔法に特化した広大な都市。

いわゆる、魔法都市。

ジョン攻略の旅をしている。 ノアはこの魔法都市の出身で、 この街にある魔法学校に通っていたのだが、 今は休学してダン

ているようだ。 ぼっちな彼女は、 魔王が作ったダンジョンを攻略すれば皆の役に立つし、 認めてもらえると考え

絶賛別行動中。そんな中で、 綺麗な街だなあ 一方俺は、日本からこっちの世界に勇者として召喚されたものの、 ノアと出会い、彼女の目的に協力するようになったというわけだ。 クラスの一部の連中と揉めて

という感想は、 残念ながら俺の口から最初に出てきた言葉ではなかった。

「はぁ……疲れた」

「さすがに一週間は厳しかったですね」

ノアは苦笑しながらそう応えた。

そう、一週間だ。

だけだが一 俺たちは第三迷宮都市ドルイの地下迷宮を攻略 -した後、この魔法都市に向けて新たな旅路に就いた。 といっても、 基本的に勇者一行に助けられ

意を抱いて、 地下迷宮攻略で情けない結果を残してしまったことを反省した俺は、 この街を目指したのだ。 自らを鍛え上げるという決

都市の名前にもある通り、魔法を学びに行くのが目的である。 まあ鍛えるといっても、 何も筋力トレーニングや剣術を身につけようというわけではなく、 この

歩で行くことをノアに提案していた。 道中でも積極的に魔物たちと戦って、 少しでも強くなっておこうと考えて、 俺は魔法都市まで徒

んて柄にもなく恥ずかしいことを考えてしまったからなんだが……当然本人には言っていない。 いや、本当はもっと別の理由が……あの人見知りの童顔少女とゆっくり旅を楽しみたい あ、

たのだが、その行程にまさかまさかの一週間もかかってしまったのだ。 そんなこんなあって、俺たちは第三迷宮都市ドルイから魔法都市まで徒歩で移動することになっ

丸々一週間も歩き続けるのは、 強くなるという決意を固めていたとしても、 さすがにしんどい。

それに……

「こんなことなら、 やっぱり馬車を使った方がよかったかもしれませんね

: :

今さらながら、 ノアの言葉に納得してしまい、反論が出てこない

結論を言ってしまうと、俺は全然強くなれていなかった。

それもそのはず、出てくる魔物が弱すぎてレベルが上がらなかったのだ。 おまけにずっと同じ樹

木の魔物 -コープトレントばかりで、 戦闘経験すら得られなかった。

い。多少の苦戦はしたが、 強いて挙げるとすれば、 まあそれだけ。 魔法都市の近辺でスペルインプという魔法を使う魔物が現れたことくら

正直、馬車に乗ってさっさとここに来ていた方が断然よかった。

「ご、ごめんなノア。そのぉ……俺のせいで無駄に歩かせちゃって」

俺は後悔に駆られて、隣にいる水色髪の三つ編み少女に謝罪する。

彼女は道中でも幾度となく馬車を使った方がいいと主張していた。

だからきっと怒っている。俺の勝手な都合で歩かされたことを。

そう思っていたのだが、 ノアはなんでもないように、 視線を前に向けたまま言った。

別にいいですよ」

次いでこちらに顔を向けると、年上ぶったような口調で続けた。

決めたことじゃないですか。それに私は楽しかったですよ、 「確かに馬車などの他の移動手段を使った方がお利口さんだったと思いますけど、 ぬかるんだ森の散歩に、 結局は二人で 険しい岩山の

「……そ、そう?

持ちは一瞬で消え去ってしまう。 ノアがそう言うなら……と、 俺はこっそり胸を撫で下ろしかけるが、 続く彼女の言葉で安堵 Ō 気

「あとそれから、魔物がうじゃうじゃいる大草原での野宿に、 楽しい思い出になりました。忘れられないくらい」 虫がうじゃうじゃいる洞窟での雨宿

心なしか、ノアの顔が引きつっているような気がする。

「……やっぱり少し怒ってない?」

「怒ってませんよ」

彼女はニッと悪戯っぽい笑みを浮かべて、 俺より一歩前に出た。

「それでは、早速魔法都市に行きましょう。 私が色々と案内してあげますから!」

「おっ、 おう」

俺は先に行くノアの後を慌てて追いかけた。

そう心に決めると同時に、 あの感じだとたぶんそこまで怒ってはいないだろうけど、一応後でもう一回謝っておこう。 俺はこのノアの元気すぎる様子に、 少しばかり違和感を覚えていた。

「うわぁ……綺麗だなぁ……」

「みふっ、 そうですか。私はもう見慣れてしまって、そんな風には思いませんけど」

合った。 俺とノアは魔法都市のメインストリートで立ち止まり、ぐるりと周囲を見回しながら感想を言い

見ると、自然と感嘆の言葉が出てきてしまう。 この世界では初めて見る高層の建物たち。そして自然のものとは思えない青い光の 風景。 間近で

他の街同様、 中世ヨーロッパ風の面影は若干残っているが、 建築物のほとんどが大理石のような

素材でできているので、より洗練された印象だ。 木造の宿屋や、 レンガ造りの一軒家が立ち並んでいた田舎の牧歌的な雰囲気や雑多で活気がある

迷宮都市とは明らかに違う。

な本を持ち、いかにも魔法使いが溢れている街という感じだ。 大きめのローブに身を包んだり、 のローブに身を包んだり、色違いのマントを羽織っている人々。街を行き交う人々の様子も大きく異なっている。 その大半が杖や難しそう

まだ朝早い時間ということもあるかもしれないが、 無駄に騒いでいる人はおらず、 街全体が、 高

貴な雰囲気に包まれている。

ない。 でいて、そこにやや荒っぽい人たちが駆け込むという光景が多かったが、 今まで俺が立ち寄ってきた迷宮都市では、こういったメインストリート ここではそれがまったく には所狭しと出店が並んであせ

なか入りづらいけど。 代わりに、オシャレなお店がずらっと並んでいる。残念ながら、 庶民派の俺としては、

みた。 あら かた街の様子を見終えたところで、 俺は隣を歩く優秀なガイドさんにあれこれ質問をし

「この街の青い光って、一体どういう原理で光ってるんだ?」

ノアは、 メインスト リートの端に立てられた街灯に目を向けながら答える。

あの鉄柱の上に吊るされたケースの中には、その魔物の鱗と、微量の魔力を放ち続ける植物が入っ ていて、原理としては、 「あれは、 「へえ~」 ある魔物の鱗が光源になっているんですよ。魔力を浴びると薄青色の光を放つ魔物の鱗。 その鱗が植物から魔力を吸い上げて発光し続けている、 ということです」

電池と電球みたいな関係か。

なんだか現代的だなぁ、 なんて思い うつ、 俺は隣の少女に次の質問を投げかけ

「じゃあ、建物の中が明るいのも、その光のおかげってわけ?」

ものがあるんですよ 魔法都市では魔法科学を利用したあの光が、 「はい、そうですよ。迷宮都市や小さな村なんかではオイルランプが主流になっていますが、 皆のことを照らしているんです。 他にも色々と面白い この

「へぇ~、魔法科学かぁ……」

俺は感嘆の声を漏らしながら、改めて周囲に目を向ける。

建物の外観としてはまだまだ異世界の街並みという印象はあるが、どこか異世界感が和らいで、

むしろ日本の都会に近い感じがするのは、そのためなのかもしれない。 第三迷宮都市ドルイから歩いて来られる距離なのに、これほど技術力に差があるなんて驚きだ。

やっぱり魔法は凄いものなんだと、改めて認識させられた。

「えっ?」

「それじゃ

あ、まずはどこに行きますか?」

今度はノアからの質問。

この街に来た目的は、俺が魔法を学ぶ以外にもう一つある。

ノアが学校に休学の延長を申請するためだ。

それを踏まえて、 どちらの用事もさほど急ぐものではないので、少しばかり時間に余裕がある。 彼女はこの街で観光やら食事やら買い物やらをしようと、 俺にどこに行こうか

と聞いてきたのだ。

16

俺は腕を組み、 むむむとしばし悩んでから答えた。

「じゃあ、ノアのおすすめの場所から」

「えっ、おすすめですか?」

悩んではみたものの、 結局は人頼み。

ことすらよく分かってないのだから、どんな施設があるのか見当もつかない。ベテランの方にお任 やはりこういうときは、 初心者が無闇に行き先を決めるべきではない。そもそも俺はこの世界の

せするのが吉だ。

「では、そうですねぇ……」

数秒の思考の後、頭上にピコンと豆電球が光ったかの如く、ノアは何か水色髪の三つ編み少女は、顎に手をやり、むむむと真剣に悩み始めた。

ノアは何か閃いて顔を上げた。

「では、 お風呂に行きましょうか。あそこなら朝から営業していますし」

「えっ、ふ、風呂!?

街中ということも忘れて、 思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

そのせいでちらちらと周りから視線を浴びたが、そんなのお構いなしに俺はノアに聞き返した。

「ふ、風呂って、あの風呂? 宿屋にあったような風呂のことか?」

彼女は三つ編みを揺らしながら軽くかぶりを振る。

「いいえ、もっと大きなやつですよ。 魔法科学を利用した、とっても大きなお風呂です」

「大きな風呂、か」

そう言われて、日本の温泉や、 ホテルの大浴場を思い浮かべた。

今まで利用していた宿屋にも一応入浴施設はあったが、どれも一般家庭レベルのものだった。 シャワーだけという簡素な浴室もあったし、 シャワーに小さな浴槽という若干豪華な組み合わせ

もあった。それも街によって広さや設備が違ってくる。

俺としてはそれで十分だったのだが、 もっとでかい風呂があるというなら、 少し見てみたい気も

科学の力で完成されている特大風呂というのは、 今まで使っていた風呂やシャワーも魔法か何かの力を利用していたっぽい かなり興味をそそられる。 ので、 それ以上に魔法

由を語ってくれた。 悪くないかも……という考えがうっすら浮かんできたところで、ノアがそこを行き先に選んだ理

「長旅でお互い疲れているでしょうし、 しっかり体を休ませてからの方が魔法都市の見学も捗ると

思います」

「はぁ……なるほど」

そう言われてしまったら、もう断る理由なんかない

ていうか、普通に入ってみたいし、 大浴場。

「んじゃ行くか、その大きな風呂」

「はい!

トリートを進み始めた。 いつも以上に元気な返事をしたノアを先頭に、 俺たちは風呂屋を目指して、 魔法都市のメインス

を経た後とあっては、風呂のありがたみが身に染みる。 この世界に来る前はカラスの行水の如くテキトーに風呂を済ませていた俺としても、 野宿や長旅

く青色の背中に、冗談半分でその疑問を投げかけてみた。 いやぁ、楽しみだなぁ……という期待を抱くと同時に、 ある疑問が脳裏に浮かんだ俺は、

「ちなみにそれ、混浴ってことは……」

でこちらに向けられた。 ギロッと、いつもの可愛らしい目はどこに行ったのかと問いたくなるほど鋭い視線が、 凄い速さ

――ないですよね。すみません」

ながらぺこりと頭を下げるしかなかった。 健全な男子高校生としては当然の、 邪な考えを巡らせた俺は、 冷や汗で額をびしゃびしゃにし

ごめんなさい。

「はい、着きました」

「おぉ……」

りにある、そこそこ大きな建物だった。 水色髪の三つ編み魔法少女に案内されて辿り着いた場所は、 メインストリートから少し外れた通

大理石のような素材でできた他の建物たちと違って、 なぜかここだけは木造で、 旅館みたいな外

古風な、独特の雰囲気を醸し出している。 所々にあの魔物の鱗を利用しているらしい青い光が、 提灯のようにぶら下げてあり、 幻想的か

そして入り口は二つ。 一つは青い布、もう一つは赤い布が入り口に垂れ下がってい

この暖簾っぽいものが男湯と女湯を分けているのだろう。

ここまで観察した限り、かなり日本の銭湯に似ている気がする。

ていうか、怖いくらいそっくりじゃない?

「それでは後ほど、あそこの噴水前に集合ということで_

「りょーかい」

そして俺たちは、別々の入り口から風呂屋の中に入っていった。

最初に見えたのが、 受付と思しきカウンター。 その奥に曇りガラスの扉が確認できるが中の様子

は見えない

ばらく立ち往生してしまうことだろう。 おそらく、 初めての人がいきなりここにやってきたとしたら、どうすればい į, のか分からず、

しかし俺は、ここに来るまでの間にノアからレクチャーを受けている。

はじめに、 カウンターで料金を支払う。

何時間制というコースみたいなものはなく、 一律五十リールだ。

そして次に、曇りガラスの扉の向こう側にある脱衣所に突入。

ここで早くも魔法科学らしい代物が登場する。

洗剤要らずの魔法の洗濯機に、 超高速乾燥機。ちなみにどれも追加料金なしで利用できる

せっかくだから、俺は脱いだ服と合わせて手持ちの装備をすべて洗濯機にぶち込むことにした。

受付を済ませてから一分と経っていないが、 扉を開けると、そこに広がっていたのは、まさしく銭湯のような光景だった。 俺は早速浴場に足を踏み入れる。

ホテルの大浴場の方が近い感じがするかも。

壁際にはシャワーと鏡、 それと風呂椅子という三点セットがずらっと並んでいて、 最奥には何

人も同時に入れそうなくらい巨大な浴槽がなみなみと湯を湛えていた。

大きな浴槽の隣には、 もう一つ小さな浴槽があり、その近くに何やら入り口とは別の扉が見える。

そこから出てくる人たちは揃って体を真っ赤にしていて、 出てくるなり小さな浴槽にダイブして

たぶんあれは、サウナ的なものだろう。とすると、この小さな浴槽は水風呂かな。

浴場に入ってからのことに関してはあまりレクチャーを受けていなかったので、 俺は体を洗う前

に中を徘徊して、至るところを観察した。

その後俺は周りの入浴者たちに倣って湯船に浸かり、魔法都市の風呂を思う存分楽しんだ。 若干不審者じみている行動だが、この世界でも珍しい施設だからか、怪しまれることはなかった。

復手段なんじゃないだろうか。 体を綺麗にすると同時に疲れを取ることもできるだなんて、 実はお風呂って魔法よりも優秀な回

しみじみとそう思ってしまうほど、 長旅後の風呂は格別に気持ちの V i ものだった。

でに約束の集合場所にノアがいた。 体も服もさっぱりさせて、カウンターで買ったヨーグルト風味の飲料を手に風呂屋を出ると、 す

飲みながら、気持ちよさそうにくつろいでいる。 噴水の脇に腰掛け、 いつもは三つ編みにしている水色の髪を下ろし、 俺と同じくヨーグルト水を

先を見つめていた。 ぷらぷらと足を揺らすその少女は、 俺が風呂屋から出たことに気がつかず、 ぼんやりと自分の

久しぶりにこの街に帰ってきて、 その上お気に入りの風呂屋で癒やされたのだから、 ほっと胸を

21

20 ぼっちは回復役に打って出ました3

撫で下ろし、深く安堵しているはずだ。

いない。 顔には決して出さないけど、きっと俺なんかには計り知れないほど気持ちが軽くなっているに違

ので、ゆっくりと歩み寄っていった。 もう少しあのまま一人にさせてあげようかな、 なんて考えてもみたが、 あまり待たせるのも悪い

手を上げて声をかけようとした、そのとき……

不意に、緩んでいた彼女の目元に、翳が差したように見えた。

所在なさげに揺らしていた足を止め、容器を持つ手は何かを堪えるように、 小刻みに震えてい

一瞬、幻ではないかと思ってしまった。

瞬きをしたら元に戻る、と。

うな だけど現実はそんなこともなく、彼女はまるでこれから地下迷宮のボス攻略戦に参加するか -いや、もっと絶望的な未来に恐怖している、そんな様子で一人静かに固まっていた。 0

俺は掛ける言葉が見つからず、彼女と同じくしばらく固まってしまう。

を装って声をかけた。 やがて硬直から解放された俺は、 中途半端に上げていた手を今度はまっすぐ伸ばし、 努めて平

「ノア、お待たせ」

すると、 ノアは顔をばっと上げて二、三度瞬きをすると、 何事もなかったかのように返事をした。

「あっ、ツエモトさん、おかえりなさい」

「うん、 ただいま。って、この場合おかえりなさいはおかしくない?」

でどうでした、お風呂?」 「え? おかしくないですよ。 私が案内して、 私が紹介したお風呂屋さんに来たんですから。

「あぁ、汚れも疲れも綺麗さっぱり落とせたよ。 これならノアが気に入るのも分かる気がする」

「ですよね」

そう言って彼女はふっと微笑みを見せる。

風呂に入る前となんら変わらないやり取り。

いつも通りのノアだった。

もしかしたらさっきノアが暗い表情だったのは、 長旅の疲れが一気に押し寄せた影響なの かもし

れない。

それか、のぼせていただけだ。

そう解釈することにして、 俺は先ほどのワンシーンを頭の中から切り離し、 ノアに案内の続きを

促した。

「んじゃ次は、どこに行く?」

ですか?」 「そうですねぇ……なら、 近くにあるおすすめのお店に、 片っ端から入ってみる、 というのはどう

「おう」

俺はただ彼女に案内されるまま、 再びメインストリートの人ごみの中に入っていった。

その後は、

ングを楽しんだ。 ノアにおすすめされた喫茶店で軽く朝食をとり、その後は、実に楽しい時間が流れた。 その後服屋や雑貨屋に入って思い 切りショッピ

年心を擽られてつい夢中になってしまう。 便利な生活用品はもちろん、 魔法仕掛けで動く玩具が並べられているお店まであるときたら、

いた。 俺たちは、互いにはじめて見せるくらい の笑顔で、 魔法都市のメインストリ トを歩き回 って

これがノアの故郷。魔法都市か。

前に彼女が故郷を大事にした方がいいと語っていたのも、 分かる気がする。

これほど良い街だったら当然だ。

いう意味が一番大きいと思う。 しかし彼女がそう言ったのは、 それだけが理由というわけではなく、 生まれ育った場所だからと

彼女は絶えず口を動かし、それはもう楽しそうに魔法都市の成り立ちやら観光地やらを俺に教え

誇らしくて気持ちがいいことなのだろう。 こうして故郷に戻ってこられて、それを人に紹介して自慢できるというのは、 これ以上ないほど

と思っている。 彼女が楽しそうに喋っていると俺も嬉しかったし、 そんな彼女の故郷を見られて本当によかった

だけどなんでだろう、 時折ノアの表情が曇っているように見えるのは……

いや、実際にそういう表情をしたわけではない

むしろいつも以上に楽しそうに笑い、 いつも以上に言葉数が多く、 元気な様子を見せている。

けど、それが逆に嘘っぽく感じられてしまう。

反応が過剰で、どこか無理をしているというか……

しかし、 普段より元気なのは大変よろしいことなんだけど、 この楽しい時間に水を差すまいと思い、俺はその違和感を口にすることはなかった。 いつもと違い過ぎるのもどうなんだろう。

きっと、 久しぶりの帰郷で気持ちが高ぶっているだけだろう。

「あぁ〜、 このお店も面白かったなぁ」

「ですね」

何軒目か分からない店から外に出ると、 俺とノアは揃って大きく伸びをした。

そして今さっきまで楽しんでいた店の軒先を、 チラッと振り返る。

ここは魔法で作られた雑貨がたくさん売られている雑貨屋さん。

ぎてい 商品を購入することはなかったが、 見ているだけでもとても面白くて、 あっという間に時間が

て戻ったことがあります。そのとき、 だけでも面白いんですよね。それで、 うく泥棒になるところでした」 「小さいときにこのお店のことを知ってから、よく学校のお昼休みに遊びに来てました。 伸ばした両腕をだらんと下げて、隣で笑うノアが少し感慨深そうに口を開 間違って商品を手に持ったままお店を飛び出しちゃって、 時間を忘れて遊んでいたら、 次の授業が始まる寸前で、 いた 見てい 慌て る

ノアは相変わらず楽しそうに笑い続ける。

俺も釣られて笑みを浮かべながら、 当てもなくメインストリ トを歩き始めた。

「それで、 次はどこに行くの?」

密かにわくわくしながら、次なる行き先を尋ねてみる。

「えっ……そうですねぇ……」

もう何度目とも分からないノアの思案顔を眺めながら、 俺は脈絡なく "ある思い*

男の俺はとんでもなく情けない彼氏という烙印を押されるんじゃないだろうか。 もし……もし仮に、これが男女のデートだったとしたら、行き先を女性に委ねてばかりいては

これはそもそもデートなどではなく、 あくまで観光客とガイドさんという関係なのだから、

などと、言い訳がましく心中で喚いていると、その思いは間違い以外の何ものでもないのだが。

えを言った。 ノアは結論を出したようで、 苦笑しながらその答

「この近くでおすすめできそうな場所は、 もう大体回ったと思います」

「えつ……そ、そう」

そうなると、 次に行く場所に迷ってしまう。

ガイド役のノアに案内できそうな場所がないとなると、 あとは目に付いた店を回っていくしか

いかな。

そろそろ日も高くなってきたから……うう~ん……

らどこに入っても面白そうだ。

何軒か回ってこの街の店の感じも掴めてきたし、

あまり深く考えなくても、

魔法都市にある店な

俺はメインストリートを進みながら考えを巡らせ、 この魔法都市に来た目的を果たすという、

難な結論に至った。

「んじゃ、 そろそろノアが通ってる学校にでも行くか

俺は「そうですね、そろそろ行きますか」という反応を予想していたのだが……

「えっ!? 魔法学校にですか?」

「えっ……う、 うん?」

こちらがびっくりするほどの勢いで、ノアは驚いた。

そして俺はノアの慌てぶりを疑問に思いつつも小さく頷く。

真っ当な考えだと思う。 もう十分魔法都市の観光を楽しんだから、このタイミングで街に来た目的を果たそうとするのは

魔法学校に行けば、 ノアの休学延長の届け出を出せるし、 図書館などで俺が魔法の知識を得るこ

ともできるだろう。

まさに一石二鳥。

他に行くところがないなら、当然の帰結とも言える。

ところが、ノアは足を止め、 視線を宙に泳がせながら、引きつった笑みを浮かべている。

そして、 不安そうに眉をひそめて、誰に言うでもなく呟き始めた。

「……そ、そうですか。私の通ってる学校に……ですか……そうですか……」

?

どうしたというのだろう。

何か問題でもあるのだろうか。

まさか、ここまで来たものの、 実は部外者の俺が行くのはまずいのだろうか。

俺は困り顔のノアに問いかける。

「えっと……だ、だめか?」

「えっ……い、いえ……別に……」

そう言って、ノアは俯いてしまう。

少し間を置いて、ノアは何事かの考えをまとめ終えたのか、 苦笑しつつ顔を上げた。

「じゃ、じゃあ行きますか……魔法学校」

「え、えっと……」

そんなノアの様子を見てしまったら、素直に頷くこともできなかった

「ノアが嫌なら、俺は別に……」

「だ、大丈夫ですよ。学校、一緒に行きましょう。 ツエモトさんの魔法のお勉強と、 休学の延長手

続きが同時にできるわけですしね」

····?

学校という単語一つでノアの様子が変わった。明らかにおかし

自分の通っている学校を見られるのが恥ずかしい、という考えもあるかもしれないが、 その場合

こいつは正直に言うはずだ。

だからこの過剰な反応はちょっと予想外だ。

せん、なんて冗談半分に笑いながら。

ツエモトさんにはちょっとお見せしにくいんですよ、

とか、

ツエモトさんには見られたくありま

でもなぜか、 その理由を問い質すのは憚られた。 聞いちゃいけないことだと、 無意識に理解し

た――あるいは、思い込んでしまった。

頭から疑問が消えることはなかったが、 とりあえずの了承は得られたのだから、 俺は小さく頷く。

「じゃ、じゃあ……行こうか、魔法学校」

「……はい。では、案内しますね」

まだどこか取り繕っている感じはするが、 それでも再び笑顔を向けてくれた彼女を見ると、

どの違和感はただの思い過ごしだったように思えてくる

2

都会的な街並みを抜け、都市の中心区画に辿り着いた。

どうやら魔法都市の構造は上空から見ると綺麗な円形になっていて、 その中心に魔法研究や教育

関連の施設が集まっているらしい。

そして、そのうちの一つがノアが通っている魔法学校だそうだ。

「こ……ここが、 私が通っている王立クラフト魔法女学院です」

三つ編みを結い直していつもの格好に戻ったノアが、 控え目な仕草で指をさした

「へえ~」

眼前にそびえる巨大な校舎を眺めながら、 俺はこの街に来て何度目か分からない感嘆の声を漏ら

した。

合っている。 白を基調とした清潔なデザイン。 見渡す限り若々しい女生徒たちが行き来し、楽しそうに喋り

皆魔法使いのマントを羽織っていて、 中にはマントをちょっとばかりカスタマイズしてオシャレ

視界内には一人として男性の姿はない。に着こなしている生徒もちらほら。

この光景を眺めているだけで、 不思議と良い匂いが漂ってくるような……まあ、 これはたぶん気

のせいだ。

すっかり見惚れていた俺は、 かなり遅まきながら、 驚きの声を上げた。

---って、ノアの通ってる学校って女子校だったの!!」

はい。そうですよ。さっき言ったじゃないですか」

ノアはやや戸惑いながら頷く。

俺はその事実を知り、再びノアに聞いてみた。

「も、もしかして、ノアがさっきから気にしてることって、女子校だと俺が入りづらいんじゃない

かとか、最悪入れてもらえないんじゃないかとか、そういうこと?」

だろうな。 こいつだったら、 ここまで一緒に来た共闘パートナーを学校の前で待たせるのを後ろめたく思う

そのことが頭に引っかかって、学校に行くのを躊躇っていたのか。

けど、さすがに居心地が悪いかなって。後で私一人で来ようと思っていたんです」 を嫌がるんじゃない $\stackrel{\neg}{\sim}$? え、ええ……じ、 かと思って。私が同伴するか、受付で入校証を貰えば入ることはできるんです 実はそうなんですよ。もしかしたらツエモトさん、女の子しか V ない所

どこか慌てるようにたどたどしく話すノア。

「いやまあ、俺は別に構わないよ。男女共学だろうが女子校だろうが、魔法を学ぶ施設に変わり

ないわけだし、ノアが通っている学校なら、ちょっと中を見てみたいしな」

「えっ……そ、そうですか……」

先ほどより一層、ノアの顔に滲む不安の色が濃くなったような気がする。

一体ノアは何を隠しているというのだろうか。

それとも他に、 何か俺を学校に入れたくない理由でもあるのだろうか。

言いたいことを素直に、それこそいらないことまで次々と話していたのに。 今まで見ず知らずの人に対してはとてつもない人見知りを発揮していたが、 なぜか俺に対しては

ここでまた「俺は外で待ってるよ」なんて言っても、 「大丈夫ですよ」と先ほどとまった

く同じやり取りになるに決まっている。

だから俺は、少しばかり遠慮を省いて、彼女を促した。

さっさと休学届を出して、 少し学校を見たら早めに立ち去ろう。 魔法の勉強ならここじ

なくてもできるだろうし」

「……は、はい」

ノアは弱々しく、だが少し安心したように頷いた。

用だ。 ノアが何を不安に思っているのかは物凄く気になるけど、 触れてほしくなさそうだし、 詮索は

とりあえず、早めに学校を離れてしまえば大きな問題はないだろう。

彼女の不安がうつったわけでもないが、 俺は少し緊張した面持ちで校舎へと足を踏み入れ た

由に見学していて構いませんよ。三十分後に一階の食堂で合流しましょう」 それじゃあ私は休学の申請に行ってきます。しばらくかかると思うので、 ツエモトさんは

職員室らしき部屋の前の廊下に、ノアの声が響き渡る。

「おう」

俺の懸念に反 ここに来るまでの間に特別何も起こらなかった。

受付で入校証の受け取りをスムーズに済ませ、 この部屋まで歩いてきた。

道中見かけた気になるものについて俺が質問し、ノアがそれに答えてくれる。 今まで通りのやり

取りが続いた。

を縮めて視線を下げたりしていたことくらいかな。 気になったのは、 ノアが妙に周りを気にしてそわそわしていたり、 生徒たちとすれ違うたびに身

かったけど。 まあ、俺も前の世界の学校でそんな感じだったから、 変にツッコミを入れるようなことはしな

うんだよなあ。 街中を一人で歩くのと違って、 学校という閉じた社会の中だと、 自分がぼっちだって意識しちゃ

空いてる方の手を振った。 などと情けない思考を巡らせていると、 職員室のドアノブに手を掛けたノアが、 振り向きざまに

「そ、それでは……また……」

そう言って少女は部屋の奥へと姿を消した。

ノアのことが少し気掛かりではあるが、 せっかくの機会だし、 ここはお言葉に甘えさせてもら

由時間で存分に魔法学校を見て回ることにする。 きっちり三十分後に一階の食堂に行って、さっさと立ち去ればいいだけだ。 今は許されたこの

ものだ。 ノアとは逆に、 自分と全く無関係な学校を散策するのは気が楽というか、 ちょっとワクワクする

俺は職員室のドアから視線を外し、 自分が通っていた学校の倍近くある広い廊下を、 一人で歩き

いよいよ魔法学校の見学開始である。

今は授業中なのか、だだっ広い廊下に生徒の姿はない。

廊下と同様にこれまた大きな教室内からは、 教師のものと思しき声が微かに漏れてくる。

その教室のドアが少し開いていて隙間ができていたので、近づいて覗いてみる。

教室内には木でできた横長の机が階段状に並べられていて、 ほとんど空席がないくらいに大量の

女生徒で溢れていた。

ペラと淀みなく話している。 正面側の教卓と思われるところには気むずかしそうな男性の教員が立ち、 生徒たちに向けてペラ

たが、ここはなんだか大学の講堂っぽい印象を受ける。 俺が通っていた偏差値四十程度の公立高校では、狭苦しい教室にギリギリの間隔で机を並

にファンタジー世界の学校だと分かる。 しかし授業を受けている生徒たちは、 揃って魔法使い特有のマントを羽織っているので、 明らか

俺は教室から目を離し、再び広い廊下を歩き出した。

変わらない 今のところまだ魔法の実技は見学できていないので、 ただ授業をサボってぶらついている生徒と

35

覗き見ることくらいしかできないのだ。 まさか教室に入って針のむしろ状態で講義を聞くわけにもいかないし、 せいぜいさっきみたい

もう少し魔法について何か知識を得られたらい いと思っていたんだけど、そう上手くは か な

し召しなのかもしれない。 学費も払ってない人間が他の生徒と同じように魔法の勉強なんかするんじゃないという、 神 ₀ 思想

そんな他愛もないことを考えながら歩いていると、 今度は廊下の窓から外の景色が目に入って

校庭で女生徒たちが杖を構えて何かをやっているようだ。

生徒同士で互いに杖の先端を向け合っている。

これは魔法を使った一種の試合だ!

そう直感した俺は、 窓に飛びついてその様子を見つめた

時に火や水を放ち、それを防ぐ盾を張り、肉体強化をしているのか、 いかにも魔法使いらしい試合が展開されている。 普通ではあり得ない跳躍で

おそらく、この学校における体育の授業的なものだ。

窓から見ていると、その授業の詳細が分かってきた。

魔法の練習をしている生徒と、 魔法で模擬戦をしている生徒がいるようだ。

人練習をする生徒はそれぞれ標的などに魔法を発動し、 模擬戦をやる生徒たちは二人一

なって向き合っている。

互いに杖の先端を向け合うと、 それを合図にして魔法の撃ち合いが始まる。

これだ。 俺はこういうのが見たかったんだ。

魔法による実戦の訓練。

学校の授業だからか、あるいは女生徒同士だからか、 それほど派手な戦いではないが、

る戦闘のいい勉強になる。

どの組でも決まって相手に杖を向けてから試合を開始しているところを見ると、

行為には試合開始時の礼、あるいは宣戦布告のような意味合いがありそうだ。

俺はしばらくの間、窓枠に頬杖をついてその光景を眺めていた。

ふと魔法演習をやっている一画に目をやると、 模擬戦や個人練習とは別の実習がひっそりと行

れていることに気がついた。

そこでは怪我をしたと思しき生徒たちに何やら魔法をかけて、 その経過を見てい

もしや……というか、絶対にそうだ。

「回復魔法の……演習だ」

感じられる。

見覚えのある薄黄色い魔法の光を、 必死の形相で絞り出している女生徒たち。 皆相当な真剣さが

あれは初級の回復魔法、 ヒールだ。

的なやり方だ。 に模擬戦で軽く負傷した生徒を対象にして、 順番に回復魔法の練習をしている。 なんとも効率

まともにそれを使えている生徒はほとんどいなかった。 模擬戦組の生徒たちほどではないが、 回復魔法を練習している者の数はなかなか多い。

ちょっとした掠り傷程度すら、

治すのに随分苦労しているようだ。

以前ノアが言っていた通り、 回復魔法を使える人は極端に少ないという話は事実らし

てしまった。 回復魔法の練習をしていた女生徒たちは、怪我を完治させられないまま、 実習を打ち切

複数の怪我人がその場に留まり、練習をしていた女生徒たちが後ろへと下がっていく。

徒たちの間から、一人の少女が歩み出てきた。 まさかそのままほったらかしにするわけはないよな? などと不安に思っていると、 下が った生

ふんわりとしたライトブラウンの長髪。 おっとりとした可愛らしい目つきで、

でくれそうな優しいオーラを発している。 他の女生徒たちも異世界クオリティの美少女ばかりだが、 前に出てきたその少女は明らか に別格

すべてを包み込ん

当然お顔は大変お綺麗なのだが、 "可愛い* B ″美しい* などではなく、 "優しい という表現が

だった。

遠くから見ているだけでは性格など分からないはずだが、 俺にはそう思えてならなかった。

彼女は周りの人たちを代表して怪我人たちの前に立つ。

皆その姿をわくわくした面持ちで眺め、中には頬を染めて憧れの視線を送る者もい

俺も息を呑んで、じっとその光景を見つめる。

そして、 その少女が怪我人たちに向けて手をかざした瞬間、 目を見張る現象が起きた

なっ!!」

彼女の足元を中心に眩い薄黄色の光を放つ円形の魔法陣が展開し、 次々と怪我人の傷を癒やして

れとはまったくの別物。

俺も使うことができる初級の回復魔法、

ヒーリング……のはずだが、

彼女が使っている魔法はそ

通常のヒーリングではとても考えられないような現象が起きている。

魔法陣が……移動している?

魔法陣は校庭を縦横無尽に駆け巡り、回復実習の傍に来ていない者も含めて、数十人、厳密には、まるで手足を動かすかのように彼女がそれを操作していると言った方が正 数十人もの怪我人

たちを瞬く間に癒やしてしまった。

ダンジョン攻略の際などに、 他の回復職の人と一緒になったことはあったが、 あんな回復魔法の

テクニックは一度も見たことがないし、話に聞いたこともない

たちもその手を止めて見入っている。 その光景に、 校庭にいる女生徒たちからは感嘆の声が漏れ、 魔法による模擬戦を行なっていた者

少なくともここから見る限り、誰一人としてあの少女に対して嫌な顔をしていない。 日本だとああいう出しゃばった行為は、下手をすると周りから反感を買ってしまうこともあるが、

ずいぶんと皆から慕われているようだ。

間違いない、あの人が、聖女、だ。

この街に来る前に ノアから聞いていた、凄腕の回復魔法使

魔法都市で一番の回復魔法の使い手であり、 その飛び抜けた美貌と絶対的な人徳も合わさって、

聖女という呼び名が定着した超有名人。

そう確信した瞬間、どこからか甲高い鐘の音が学院中に鳴り響いた。偶然にも、俺はその噂の女生徒を見つけてしまったんだ。

イムと思われる。 リズムやメロディーこそ俺が知っているものとは違うが、この音は授業の終わりを知らせるチャ

き上げていく。

予想通り、それを合図に校庭で行われていた演習も終了し、 俺がいた学校のようにスピー カー から流れてくる無機質なものではなく、 生徒たちはいそいそと校舎の中に引 本物の鐘の音だ

できればもっとあの人の回復魔法を見ていたかった。

きっとあれより凄い魔法が他にもたくさんあるはずだから。

さっきの一幕は、授業の終わりが近かったから、怪我人の治療をあの人に一発で済ませてもらっ

た、といったところか。

ちょっとしたヒントも掴めたし、 見学料などを取られずに授業の演習が見られたのだから、

はそれだけで満足しておこう。

気づけば、だだっ広い廊下にはポツリポツリと生徒が出始めていた。

どうやら俺は、 かなり長い時間、校庭の実習に見入ってしまっていたらし

最後に聖女さんと思しき人を一目振り返ってから、その場を立ち去った。

のっけから思わぬ収穫があったおかげで、俺はうきうき気分で合流場所の一階の食堂に向 かう。

あんな風に回復魔法が使えれば、とても便利だ。

ヒーリングの魔法陣が操作できるなら、 戦闘中に取れる行動の幅が広がるし、 何より単純に強い

俺の能力で効果を反転させれば、

るはず。 本来の使い方とは違うが、どうしても戦闘面であの技の利用法を考えてしまう。

遠くから狙い撃ちが可能な範囲攻撃として威力を発揮してくれ

もちろん、

回復面でも、

一度に多くの人を癒やせるあの技術は、

とても使えるものだ。

いつか俺も使えるようになれないだろうか。

成できるんだけど。 そうすれば、攻撃役としても回復役としてもレベルアップできて、 この魔法都市に来た目的を達

「……んっ?」

階の食堂に辿り着いていた。 歩きながら回復魔法の使い ·方についてあれこれ考えを巡らせているうちに、 俺は い つ \bar{o} 間 に か

作って並べられている。 中を覗いてみると、外壁と同じく白を基調とした広い空間に、 長いテーブルが端から端まで列

それを一目見た俺は、以前通っていた中学校にあったランチルー ムを思い出した

が集まってお腹を空かせているという状況はまったく同じだった。 そこと比べれば規模ははるかに大きいし、内装の清潔感もまるで違うけど、 たくさんの生徒たち

同じ感覚だろう。 トレイを手に持ち、やがて手元にやってくる昼食をわくわくしながら待ち望む。 世界が違えども

静かだった。 しかしながら、 お昼の時間のランチル 今はまさにお昼時で、 ームといえば、 たくさんの生徒がいるにもかかわらず… そんな生徒たちで賑 わい、 とても騒がし ……この食堂は妙に い場所であ

ブルで食事をしている者はスプーンやフォークを口に運ぶ手を止め、 トレ イを持って立つ者

は足を止めて一切動こうとしない

ないらしい。 一瞬、静かに食べなくてはならないという規則があるのだろうかと思ったが、 どうやらそうでは

見てみると、食堂にいる生徒たちの視線は一点に集中していた。

不思議に思った俺は、 食堂内に足を踏み入れ、 皆が注目しているその場所を見やった

するとそこには……

「……何やってんだ……あいつ」

多くの視線が集まるその場所では、 シーンと静まり返る中、 テーブル脇の通路でノアが三人の女

生徒と対面していた。

とは言い難いが。 実際のところ、ノアはどんより暗い 雰囲気を醸 じ出 深く俯 いているので、 顔を合わせてい

するとその三人のうちの一人、真ん中にいる女生徒が一歩前に進み出た。

崩している。 ふんわりとカールした桃色のロングへアで、 皆と同じ制服をそうとは思わせないように上手に

印象と合わさって、ヤンチャな女の子っぽく見える。 ややつり上がっているがパッチリした目元が特徴的 な顔は、 どこか子供っ ぽい 雰囲気で、 服装の

そんなオシャレ少女が、 腰に手を当てて内気な水色髪の少女の前に立ち、 笑みを浮かべながら口

を開いた。

「あら~? ノアちゃ~ん、久しぶり~」

キンキンと耳に痛く響く甲高い声。

その声に対する反応はなく、 ただこの場を支配する静けさの中に、 虚しく消え去っていった。

だが、声の主はそれに関して特に気にしていないようで、同じ調子でさらに言葉を続ける。

「最近全然学校来てなかったから心配してたよ~。どこ行ってたの~?」

 $\exists \vdots$

立ち読みサンプル はここまで

しかし、またしてもその問いかけに対する返事はなかった。

桃色髪の少女はそれでも気分を害した様子はなく、 むしろニマニマした笑みを浮かべ続けている。

まるで、 目の前でうなだれているノアのことを、嘲笑うかのように。

俺はどうしてこんな状況になっているのかまったく理解できず、ただ目前の光景を見つめて固

理解できなかったのではなくて……理解したくなかったんだ。

正しく言い直せば、

認めたくなかった。

まってしまった。

本当は一目見た瞬間に直感できたというのに。

「ねえねえ、どこ行ってたのよ~? ノアちゃ~ん?」

